

伝列者採集の〈声〉  
時代の手聞き

岩倉 市郎

## 記述への模索と「態」への気づき

— 岩倉市郎の聴き書きを考える —

藤久 真菜

### 1. はじめに — 「鬼才」の前で立ちどまる —

「昔話採集の鬼才」<sup>(1)</sup>「昔話の為に生れて来たかと思ふやうな人」<sup>(2)</sup>と評されたのは、喜界島出身の岩倉市郎（一九〇四年十一月四日—一九四三年九月四日）である。「民間傳承の他の部門は知らず昔話の領域に於ては、吾々が知る限りでは最も優れた最も經驗豊かな採集者の一人であり、その採集の量に於て同君の右に出る者はない」<sup>(3)</sup>として、その「昔話の實地採集量」と「卓越せる採集技術」<sup>(4)</sup>とは、生前から太鼓判を押されていた。

「最も優れた最も經驗豊かな採集者の一人」であるというけれども、どのように「優れ」ているのか、どんな「經驗」を積んできたのだろうかと考えてみると、よくわからない。わからないまま、とにかく「鬼才」なのだ、受け流してきた自分に気づく。

没後六十年以上が経つ現在、従来の評価をくり返すばかりでは、肝心なところが見えにくい。たとえば、文野白駒の筆名で世に送り出した、最初の昔話集『加無波良夜譚』以来、岩倉の「採

集技術」を支えてきた技術のひとつに、速記術がある。「伝承者からありたけの昔話を聞き、それをそっくりそのまま速記で記録してしまふ」<sup>(5)</sup>という一九六〇年時点での速記に対するとらえ方は、一九八七年の事典記述においても、「テープレコーダーの使用される以前の調査でありながら、話者の語り口調をそのまま文字化してしまふ技術は他の調査者の追隨を許さない」<sup>(6)</sup>と大枠でくずれることなく、引きつがれる。<sup>(7)</sup>速記術は、ほぼ三十年を経てなお、「そのまま文字化」という取り上げ方で片づけられてしまふ。

速記を活用しても生じる「書落し」には岩倉自身、気づいており、「……」という表記で書き落とした部分を明示する工夫もこらさ<sup>(8)</sup>。また、「五十音では寫せない發音」<sup>(9)</sup>や、「婆様の口から出る、一種の昔話的韻律、昔話の持つ特殊な情調を寫取し再現することは不可能」<sup>(10)</sup>であることにもふれる。耳に聞こえる「發音」、口から出る「韻律」「情調」を、文字にうつしとることのむづかしさを感じながら、岩倉の手は動いていたように思う。「そっくりそのまま」<sup>(8)</sup>「そのまま文字化」で片をつけてしまふのではなく、聴きとり、書きとる

中で岩倉が働かせた取捨選択や、こらした工夫、気づきや試行錯誤の跡をたどることを始めたい。

## 2. 五冊の昔話集

岩倉市郎の仕事は、昔話に関するものに限らず、喜界島の方言集<sup>①</sup>や民俗誌の数々にわたるが、本稿では昔話資料を中心に考察を進める。岩倉の編んだ昔話集を刊行順に挙げると、①『加無波良夜譚』（筆名文野白駒 一九三二・一 玄久社発行・三元社売捌）、②『沖永良部島昔話』（一九四〇・二 民間傳承の會/財団法人民俗学研究所編 一九五五・四 古今書院再刊）、③『喜界島昔話集』（一九四三・一 三省堂/一九七四・二再刊）、④『南蒲原郡昔話集』（一九四三・十二 三省堂/一九七四・二再刊）、⑤『甌島昔話集』（一九四四・三 三省堂/一九七三・十一再刊）の五冊である。<sup>⑬</sup>

フィールドワークの時点から、これら一冊一冊に至るまでの間に、聴きためた資料は、いろいろな媒体に書きこまれ、第三者の前に届く。私はまだ目にすることがないけれども、まず、フィールドワークの最中に使用していた速記ノート<sup>⑭</sup>、さらに速記を反訳、整理した段階の資料がある。それらをもとに、書簡のかたちで送り出すこともあれば、雑誌へ寄稿することもある。資料報告、日記風にしたための記録、フィールドワークの経験談<sup>⑮</sup>など、スタイルも様々である。一冊の本へとまとめていく過程で、記述の仕方や題名が変わっていく場合もある。その変遷をみる上でも、そ

れぞれの昔話集について、フィールドワークの時期や発表媒体といたった資料群の経歴を整理しておく必要がある。本稿の主眼は、岩倉市郎の聴き書きを考えることに置いて、資料の経歴の詳細については別稿で紙幅をささきたい。

五冊の昔話集のもととなるフィールドワークの時期は、①③④は一九三〇年代前半、②⑤は後半である。岩倉が昔話を聴き集め、書きとめた一九三〇年代は、「昔話はどういふ風に採集記録するがよいか」<sup>⑯</sup>について模索され始めた時期ともかさなる。

一九三二年四月、『旅と傳説』（四一四）に、柳田國男が「昔話採集者の爲に」を寄稿する。ここで、「將來の國內採集家」に向けて、「本來形式を重んずる口碑であつた」昔話を書きとめる際に、「略」したり、「學問ある人たちの餘分の干與」「上品過ぎる翻譯」「繋ぎ合せ」「虚構」を施すといった「破壊事業」を戒める。

その三年後、磯貝勇『安藝國昔話集』（一九三四 岡書院）に付された「一つの感想」という文章の中で、早川孝太郎が「昔話の採録」について述べる。「採録者が説話者を前にして、その口から漏れる處を記録する」やり方と、「採録者が同時に説話者を兼ねてゐて、幼年時代又はそれ以降に於ける、嘗ての記憶を記述する」やり方との「二つの様式」を考えている。

一九三六年五月、『昔話研究』誌上に、柳田國男「昔話採録様式」が載り、三ヶ月後には『昔話採集手帖』（柳田國男・関敬吾編 一九三六・八 民間傳承の會）が刊行される。手帖に収められた「昔話を愛する人に」と合わせて、この時期に柳田は、甲乙丙丁

式の四通りの採録様式を示す。「聴いたことを聴いた通りに」書く甲式から、「筋を明かにするを主とする」乙式、知られた型と「異なつた部分のみを報告する」丙式、「單に名稱を掲げて、其存在を報告するだけ」の丁式に至るまで、甲乙丙丁は「記述の精粗の階段を意味する」。

実地に向けて、その報告の仕方を「全國共通にさせる」<sup>(16)</sup>企てが始まると同時に、実地からもまた、「採録」の方法が意識されるようになる。どのように聴いて書くのかという模索のただなかに、岩倉市郎は『加無波良夜譚』を投げこんだ。その「小序」で、「極めて未熟な速記法に依つて、出来る丈忠實に寫すことに努力した」<sup>(17)</sup>記述であることと、「時々近所からも聴手が集つて、婆様の話の合間に、新話の話者なども這入つた」という集まる「聴手」とについてふれる。この二点は、柳田國男が『加無波良夜譚』の書評の中で、賛意を示したところでもある。速記術と聴き手の参加とを、岩倉が意識的にとりいれた方法として、次章(一)で取り上げる。さらに、これらの方法を活用することで、どのような聴き書きが可能となつたのか、岩倉の資料に沿つて考える。

### 3. 速記を手し、聴き手たちとともに

#### (1) 中根式速記法の活用と聴き手の参加

『加無波良夜譚』で用いた速記は、「極めて未熟」と自ら述べるが、刊行から二ヶ月後、東京朝日新聞に載つた柳田國男の書評は、速記術の採用を好意的に受けとめた。以後、岩倉の聴き書きに活

用されていく速記術とは、どのような技術だったのであろうか。

『島』誌上に、計六回にわたつて報告した「喜界島昔話」の初回、「蒐集の方法は柳田國男先生の『昔話採集者の爲に』に従つて、正確に多く蒐めるやうに努めてゐます」「筆記は中根式速記法に依つてゐます」<sup>(18)</sup>と「前書き」がある。速記の速度については、「目下の筆記能力は十分間約千五百であるが、昔話の進度は演説などの場合に比べてむらがなく順調で、そして概して遅いやうである。早い方で二千三百字を上るまいと思はれる。今の處千六百字以上の速度になると、書落しが出来るわけで、まことに心細く思ふ」<sup>(19)</sup>と岩倉は述べる。『通俗中根式速記法』<sup>(20)</sup>によると、人の話す速度は「一分間二三百字位」で、單純にそれを十倍すると、二千から三千となる。一九三〇年代の速記と現在の速記とを簡単に比較することはできないが、現行の日本速記協会の速記技能審査基準に照らすと、分速一八〇文字は四級にあたる。<sup>(21)</sup>

鹿児島県立志布志中学校で「昔話」「民話」「方言」へと関心をひろげていった岩倉は、「大正一二年に大阪に出、懷徳堂に学んだ」<sup>(22)</sup>。四年後の一九二七年に上京、伊波普猷に会つてゐる。ちょうどその頃に刊行された『通俗中根式速記法』には、「學生諸君及び一般筆記難の人々へ」<sup>(24)</sup>や「練習問題」の附録がつく。この手ほどき本を、岩倉も手にとつたであろうか。一九三〇年には「芝琴平町の東京日日新聞出張所に勤め、かたわら『喜界島方言集』をまとめた」という。新聞と速記とのつながりも深い。どういった経緯で、岩倉が速記術を身につけることになつたのか、ま

だ想像するばかりのところを、今後つめていきたい。

『加無波良夜譚』での速記の導入を、柳田は「多分始めての試み」<sup>(17)</sup>と評した。それでは、岩倉は、昔話の聴き書きに「速記術を応用したただ一人の人」<sup>(26)</sup>だったのであろうか。『昔話研究』誌上では、岩倉を意識してか、速記術を身につける必要性がしばしば述べられる。たとえば、清野久雄は資料報告「東田川郡昔話」について「以上三話昭和十年九月二十九日昔の乳母田澤とめゑ氏より採集速記にふなれたため、同人の話しとも思へぬまぢくがある多謝」<sup>(27)</sup>と記し、鈴木棠三は「速記術を知らぬといふことも、採集者としての我々の重大な缺點であるが、速記でなくとも、今少し早い速度で筆記が出来るやうにしておく必要」<sup>(28)</sup>をとく。重要性を認めつつも、なかなか習得には至らない状況が、誌上からは見えてくる。岩倉以後、速記術を活用した昔話の聴き書きという実践のゆくえはどうなっていくのか、問いをひとつ立てておきたい。

もう一点、岩倉がころがけた点に、聴き手の存在がある。岩倉は、昔話を聴く際に、複数の聴き手を呼びこもうとしてきた。『昔話採集の経験』において、「私はどんな場合でも出来る丈、若干の聴手を頼む事にして来た」と、意識的にとつた方法であることを明らかにする。聴き手の参加は「昔話の気分の上から絶対に必要な事」であるばかりでなく、「話者が話の種に窮してゐる時に、何々の話はどうだなど、端緒を興へたり、又話者が言ひ落した處を補つたりする事もよくある」。一九三五年八月に訪れた隠岐島でも、平木田由太郎さんに話してもらう際に「聴手は里の老人達

五人、時々フーンと合の手など入れて呉れたりした」<sup>(29)</sup>という。

合の手をいれたり、話を促したりと「聴手」たちの参加する場を意識的につくり出す。もちろん、この「聴手」たちのひとりに、岩倉市郎もいる。速記を手に、複数の聴き手たちとともに、岩倉は資料をどんな風に提示し、どのようなことはを拾いあげていったのだろうか。以下(2)(3)に、探っていく。

## (2) 話の流れに沿った配列

『加無波良夜譚』「小序」には、「本集はこうした経緯で蒐集する事の出来た話の中から百二話(婆様の話八四話、今井さんの話一八話)を抜き出して、話順に従つて集録した」とある。また、『沖永良部島昔話』「凡例」には、「話の配列は各話者に依つて話されたまゝの順序に従ひ、話者の順序は大體話数の多少に従つた」とある。「全国昔話記録」に収められた昔話集(前記③④⑤)の配列からは話の流れはうかがえないが、雑誌への報告という前歴をたどると、話の流れが見えてくることもある。たとえば、③『喜界島昔話集』の場合、一冊にまとまる以前に、雑誌「島」および『昔話研究』での報告を経ている。雑誌に連載された報告は、『喜界島昔話集』には結局採用されなかつた話を多くふくみ、提示の順番も昔話集での並びと異なる。例として、『島』昭和九年前期号(一九三四・四)に載つた「喜界島昔話(六)」をみる。

『島』昭和九年前期号は、半年ぶりの発行とあつて分厚い。「喜界島昔話(六)」の総頁数も、これまでの十倍近くの七〇頁に及ぶ。

『鳥』に連載された「喜界島昔話」は、一九三二年四月から十一月にかけての喜界島でのフィールドワークからの報告資料で、「以上十一月二十七日、正午より夜半過迄の話」や「以上二話。四月十七日、阿傳。東オミト婆談」(ともに「喜界島昔話(六)」より)など、聴いた日時や場所、聴かせてくれた人についての短い記述を、ところどころにはさみこむ。同日内の資料は話された順に並べてあり、流れがうかがえる。以下に、「喜界島昔話(六)」から、「以上十一月二十七日、正午より夜半過迄の話」として括られた部分の話の題名を列挙してみる。話者は、主に富實禎さん。話の進行を矢印記号で表し、後に『喜界島昔話集』に収められた話には網をかけて、同昔話集での題名と話者名とを《》内に示した。なお、「▽」記号は『鳥』掲載時点ですべており、似た話が後出する場合や、岩倉の記憶の挿入、富實禎さん以外の話者による場合などに付される。

ひなた山《富實禎さん「ひなた山」》→▽ひなた山↓握り飯と金↓子寶↓▽めし食はぬ女房↓鬼と菖蒲↓▽二人の運氣↓▽七つ肉(シシ)↓天女(其の二)《富實禎さん「天人女房(二)」類話》→▽婆と蟹↓▽爺とくひな↓芭蕉と山羊↓ウツワ舟《富實禎さん「ウツワ舟」》→▽弘法様↓金の茄子(其の一)《富實禎さん「金の茄子」類話》→河童の話↓▽河童の話↓▽河童の話↓▽河童の話↓人だく↓▽蛇の髯《富實禎さん「蛇髯人(一)」類話》→▽蛇に騙された嫁↓▽蛇に騙された嫁↓侍を不意討↓▽猿髯人↓猿の親切《平莊助さん「猿の親切」》→流れ島

↓▽岩割れ↓▽崩れ泊↓兄弟《富實禎さん「兄弟」》→馬鹿髯↓馬鹿息子《富實禎さん「馬鹿息子」》→▽馬鹿息子↓亡者と歌賭(其の一)↓亡者と歌賭(其の二)↓王様とミヤ草《富實禎さん「王様とミヤ草」》

前半、「▽めし食はぬ女房」から「鬼と菖蒲」への流れで、「此處で筆者がめし食はぬ女房の話をしたら、話者は次の話をした」と記述がある。まず岩倉の側から「めし食はぬ女房」を持ち出し、それをきっかけに富實禎さんは「鬼と菖蒲」を話して聴かせたことがわかる。また、名まえの記載はないが、岩倉の「めし食はぬ女房」に対して、居合わせた「聴者の中の一老爺は、筆者のした話は自分も幼時聴いた覚えがあると云った」。岩倉の話に対する反応が、富さんと「一老爺」とから起こる。後半、「馬鹿息子」から「▽馬鹿息子」にかけては、「馬鹿息子」に「話者は此の話をして「ブツカタの話」と言つてみた」と付記され、話者の富さんによる話の呼び名を明示する。続いて、「此の話(藤久注・富さんの「馬鹿息子」)が終つて、福本タツ鶴が、自分は金に灰を入れる話はブツカタの話として聴いたが、砂糖麴を落す話は別の話として聴いてゐると言つた」。聴き手のひとりである福本タツ鶴さんが、富さんの「ブツカタの話」を受けて、自らの「ブツカタの話」を紹介する。複数の聴き手の反応を受けながら、話がつらなっていく。

速記という技術は、ただ速く書きとるばかりではなく、話の流れを浮かび上がらせる。テープに録音して、聴きたいところだけ

を部分的に取り出すことはできず、その場ではひたすら流れに沿って手を動かすしかない。複数の人たちの口々に話の飛びかうさまをもうかがえる雑誌での報告だが、『喜界島昔話集』へとまとめられるにあたって、そのような記述は消えていく。<sup>(31)</sup>

### (3) ことばを拾いあげる

岩倉市郎の活用した速記術は、「そっくりそのまま」何もかも書き記す技術ではない。「書落し」は避けられず、どうしても紙の上にくいとれないものもある。こぼれ落ちていくものがある一方で、岩倉の耳と手とで、取捨選択して拾いあげたことばが、資料の中に残っているのではないだろうか。

『耳話研究』に報告が載った「喜界島昔話」は、大阪で出会った同郷の春里市武さんから聴いた昔話資料である。その連載第一回目に、「千人力」という昔話が載る。この中で、「處が家へ上ろうと思つて縁側に足を掛けたら、力があまり應當（話者はよく此の言葉を用ふ）しないので縁が落ちた」<sup>(32)</sup>（傍点引用のまま）というくだりがある。春里さんのよく用いることばとして「應當」を、岩倉は拾いあげる。この語は、同じ号に載る「炭焼五郎」でも用いられ、岩倉の耳にとまったようだ。私たちも、誰かと話をしながら、相手のよく使う言い回しや、口ぶりが耳に残ることがある。それが春里さんにもあり、直接「千人力」や「炭焼五郎」の昔話の内容には関わらないけれども拾いあげた岩倉の手と耳とに、今度は私の目ととまる。『喜界島昔話集』の中では「處が家へ上ら

うと思つて縁側に足を掛けると力があまりあり過ぎて、縁が落ちた」となっており、春里さんの口ぶりは隠れてしまう。

相手のよく使うことば、口ぶりを拾いあげるところに、佐佐木喜善の「老嫗夜譚」（一九二七 郷土研究社）を思い起す。<sup>(33)</sup>「自序」で、佐佐木は「婆様が好んで使つた語、ひじやうにとか感心してとか謂ふ言葉も所々に入れて置いた。氣分を大事にしたかつたからである」（傍点引用のまま）と述べる。ただ、岩倉が「應當」を書きとめたのは、「氣分」を大事にしたかつたばかりではなく、以前からいできてきた言語への興味とも関わるのかもしれない。<sup>(34)</sup>

さらに、話の流れに沿って聴き手たちが発する問いかけを、岩倉は書き残していた。和泉ひでさんの「冒の水の神（蛇女房）」で、和泉さんが「子供にはちつとも心配せんやうに乳吞まして置いての」と言つた直後、「筆者、お乳をですぬ？」と括弧つきで岩倉からの確認があり、「その話は後で言ひますが」と制されるというやりとりが記述に残る。<sup>(35)</sup> また、藤井哲也さんの「聴耳」では「坐つて居つた處が向ふで雀がチュ〜〜と盛んに鳴いてゐる。そこで聴耳を取つて耳に當てた處が」の直後に、同じく括弧をつけて「此處で筆者が、聴耳つて一體どんな形のものでせうと訊いたら祖母は別にどんな形のものとは教へられなかつた様だ、私は電話の受話機の様なものに連想してゐたと話者の談」とある。<sup>(36)</sup> 「聴耳」について、岩倉からの問いかけと、藤井さ

『昔話研究』に載った「南蒲原郡昔話(二)——新潟縣南蒲原郡葛巻村其他」―「屁放り爺(二)」では、「市(コ)プラーンと下つた」としめくくつた後に、「此處で聽手の子供が、それからどうした——と訊ねたら、話者はつけ加へて「爺さは臍を血だらけにしたとさ」と語つた」とある。<sup>(37)</sup> 同誌には話者名の記載がないが、「南蒲原郡昔話集」に照らすと、小川かずさんとわかる。「山王の小川某女も自分の子供を相手に話されたが、其話は「桃太郎」「爺と鳥」「文福茶釜」「笠地藏」等で、然も話し方は實に面白い子供調子であつた<sup>(19)</sup>」とあり、居合させた「聽手の子供」とは小川さん自身の子のようである。小川さんと子どもとのやりとりは、「南蒲原郡昔話集」にはあらわれない。

沈黙という反応もある。『昔話研究』に載った「南蒲原郡昔話」「笛吹男」では「鬼の藏へ行つて一の藏から七の藏迄入つてみたが皆んな空つぽで、七の藏に千里車と萬里車がありました。がどれが千里車だやら萬里車だやら分らない」というところまできて、「(話者此處で考へて)——兎に角萬里車に乗つて」と、しばしの考えこみの間をはさんで、「兎に角」と話は進む。<sup>(38)</sup>

自身をふくめた聴き手からの問いかけ、それへの応答というやりとり、ふつとはさまれる沈黙の間、話をし合ううちに生まれる反応の数々を、岩倉は速記の手で拾いあげた。

#### 4. 「態」の可能性——まとめにかえて——

もつと速記に熟練して「昔話態と談話態との比較でも出来るや

うになつたら面白いと思つてゐる<sup>(19)</sup>」と岩倉はいう。また、「子供を相手にすると直ぐ話す気分にはなれるらしいが、話者は話の選擇をするやうである。そして話し方も確かに所謂強いてあどけなくする傾向がある<sup>(19)</sup>」として、聴き手に応じて、口にする話題や「話し方」が変化していく様子を感じとつていた。昔話の聴き書きに取り組む中で岩倉が見つけかけていた、「態」や「話し方」という切り口から、もう一度、岩倉の資料に目を向ける。

富實禎さんに話を聞いた初日、「其兄が側に居られて、恰度「天道さん金の綱」の話が始まつた處が、『待つたい』と口を入れた。そして「昔話は要領が大事ぢや。打ち出しは、例へて言へば浦原に……とやらなければいかん」と言つて、話者に初めからやり直させた<sup>(19)</sup>。この「天道さん金の綱」は、『島』での報告と照らし合わせる<sup>(39)</sup>と、第一巻第二号「喜界島昔話(二)」に載る「姉妹と鬼」にあたり、「これも浦原に例いて話しませう」と始まる。富實禎さんの兄が要求した、この「打ち出し」に注意して資料を追つていくと、「昔有たん事には——貧乏な一人暮しの男があつて、例いりば浦原の村から川嶺の村へ用事に行こうと思つて」(「母の目玉」)<sup>(40)</sup>、「昔有たん事が——例いて言ひば、浦原の村に」(「弘法様と鬼」)<sup>(40)</sup>、「これも例いて見りば浦原に」(「アサナローの花」)<sup>(41)</sup>と、目にはいる。話の途中で、「先づ例いれば浦原の泊の様な泊であるから、其處から上つて川嶺の村に向つて歩いて行つた」(「繼子の出世」)<sup>(42)</sup>、「例へば浦原から阿傳の濱の様な處迄來た」(「死んだ娘」)<sup>(43)</sup>とさしはさまれる場合もある。話者はいずれも、浦原在の

富實禎さんである。これは、喜界島の昔話に特有の、もしくは富實禎さん独特の「打ち出し」なのだろうか。場所を移し、「加無波良夜譚」をひらく。すると、牧野悦さんもまた、しばしば同じような言い回しで、語り始めていることに気づく。「こゝらで云ふなら極樂寺の原のやうな所に」(二〇番「強情な狐」)、「昔あつたげど。——此處らで云ふならば岩佐の峠の様な處を」(二九番「魚賣と山婆」)、「此處らにすれば元町の原に」(五九番「負ろう狐」)といった部分である。昔話を口にする時に、私たちが暮らす「此處」でいうならばあの場所、この場所と、たとえを出して、聴き手をひきこみ、納得させる。この話を無視されては、「待つたい」と口をはさみたくなる。昔話を口にする者にとつても、耳にする者にとつても、大事な「要領」のひとつである。昔々あるところとは違う、この「打ち出し」を、「昔話態」と岩倉が名づけたその語でとらえ返してみたくなる。

「昔話態」と比較される「談話態」を考えるのには、次のころみが参考となるかもしれない。『喜界島農家食事日誌』(一九三八年アチックミュージアム)は、喜界島でのフィールドワークにもあたった拵嘉一郎が、岩倉の要請を受けて記した日誌である。作成にあたり、岩倉が出した条件のひとつに、「できれば食事中家庭内でかわされる、食事や農作業などに関連する会話なども記入してもらいたい」というものがあつた。この要望にこたえて、一九三六年二月十二日から翌年二月二十六日まで、中断をはさみながら日誌は続いた。「負債は怖れなければいかん、世の中に負

債程恐ろしいものはない」(一九三六年二月二十三日)という祖母のことばや、ねずみの尾をひとつ一銭で買うという通達に対して「ねずみも近頃は寶ちや」(同年五月七日)と笑う祖父のことばなど、書きとめられたのは、必ずしも「食事や農作業に関連する会話」ばかりではない。毎日の食事日誌をつけるといふ作業自体、興味深いのが、かわし合う会話の記録をもちこんだところに、あらためて注目したい。意図してのことではないかもしれないけれど、日々の中で、どんな時に、どんな話が口にのぼつたのか、「態」や「話し方」の記録の先駆的なところみとして読むこともできるからである。

岩倉市郎が探ろうとしていた「昔話態と談話態」や「話し方」とはどのようなものだったのか、それを明らかにするというよりは、岩倉のことばの拾い方や資料の編み方に、現在の問いとして、「態」を考えていく糸口を切りひらく。居合わせる聴き手たちからの働きかけ、欠かせない「要領」、話が口々にのぼってくるありようへの気づき、「態」という芽にふくらみかけている。この芽をどう育てていけるか、本稿を土台としたい。

注 (本稿では巻号は略記した。例…第六巻第五号↓六一五)

(1) 櫻田勝徳「黙つて聴いてみたい」『民間傳承』六一五

一九四一・一。

(2) 柳田國男「窓の灯」『新国学談 第二冊 山宮考』所収(『柳

田國男全集』十六 一九九九 筑摩書房)。



(3) 関敬吾「沖永良部島昔話のために」(岩倉「沖永良部島昔話」

一九四〇 民間傳承の會)。

(4) 『民間傳承』五一六に、「本會新刊圖書」として一九四〇年

三月に初めて載った『沖永良部島昔話』の広告より。

(5) 櫻田勝徳「民俗学に寄与した人々 岩倉一郎」(『日本民俗

学大系』一九六〇 平凡社)。本名である「虎一郎」の

「虎」が脱落したのか(野村純一編『柳田國男未採扱昔話

聚稿』二〇〇二 瑞木書房)、「市郎」ではなく「一郎」となっ

ている。

(6) 田畑千秋「岩倉市郎」の項(野村純一ほか編『昔話・伝説

小事典』一九八七 みずうみ書房)。

(7) 一方で、記録の忠実さばかりが評価されてきたことへの疑

問は、すでに投げかけられてきた。吉沢和夫「民話の古典

おきえらぶ昔話」(『民話』二 一九五八・十二)、糸智子「岩

倉市郎氏のこと」(『女性と経験』九 一九八四・九)参照。

(8) 「話者にゆつくり話して貰ひ書落した處は更に間直したり

して、相當ペンを働かせた一例である。それでも仕上げ

見るとまだ少々落ちた處があるが、其個所は……であら

した」(岩倉「猿聾入―或る話し方の例―」『昔話研究』一

―五 一九三五・九)、「本文中……は書落したもので、文

意不明の個所は記憶に依つて加筆し、其分は括弧に入れて

はつきり區別した」(岩倉「隱岐の島昔話」『昔話研究』一

―九 一九三六・二)など。

(9) 注(8)「猿聾入―或る話し方の例―」に同じ。

(10) 文野白駒著『加無波良夜譚』一九三二 玄久社。

(11) 岩倉著『喜界島方言集』一九四二 中央公論社。

(12) アチックミュージアムから刊行された、『喜界島生活誌調

査要目』(一九三五)、『薩州山川ばい船聞書』(一九三八)、

※『喜界島代官記』(一九三九)、※『喜界島阿傳村立帳』

(一九四〇)、『喜界島漁業民俗』(一九四二)、『喜界島年中

行事』(一九四三)がある。ただし、※印はアチックミュージ

アム編となっている。以上は、注(45) 文献に収録され

ている。

(13) 岩倉昔話集に触発され、関敬吾は沖永良部島、荒木博之

は甌島で、追跡調査をこころみた(『沖永良部島昔話集』

(一九八四 岩崎美術社)、『甌島の昔話』(一九七〇 三弥

井書店)参照)。また、水沢謙一は「加無波良夜譚」が「あ

こがれの昔話集」であったと打ち明ける(水沢謙一著『朝

日新聞新潟長岡支局編『あつたてんがな』一九七八 野島

出版)。「あこがれの昔話集」(『古典的名著』(荒木)として、

後から来る者たちをフィールドへといざなってきた岩倉昔

話集の姿をおさえておく。

(14) ともに喜界島調査にあたった捩嘉一郎によると、岩倉は「ワ

ラ半紙の綴じたものに筆記した」(『喜界島長期滞在調査の

こと』『日本常民生活資料叢書 月報21』一九七三 三一書房)。

(15) 喜界島と南蒲原郡でのフィールドワークの経験談が、『昔

話研究』一一二に「昔話採集の経験」と題して載る。同誌にはこの他、能田太郎「採集の計畫と印象（青森県三戸郡昔話採集譚）」（一一五 一九三五・九）、平野直「採集日記」（二一七 一九三五・十）、鈴木棠三「佐渡採訪記」（二一三 一九三六・七）、同「くつたん爺のこと―對馬の話者―」（二一九 一九三七・七）といった経験談が寄せられた。編集サイドからも、「どういふ方法で採集してゐられるか、お互に知りたいことです。御経験など文の長短に拘らず御送付願ひます」（二一三 一九三五・七）と募集がかり、岩倉をふくめ、それにこたえた面々の文章は、これからフィールドへ出て行くこうとするまだ経験の浅い同志たちにとって、参考となったであろう。

(16) 柳田國男「昔話採録様式」「昔話研究」二一一  
一九三六・五。

(17) 柳田國男「『加無波良夜譚』―文野白駒著―」（『退読書歴』所収（『柳田國男全集』七 一九九八 筑摩書房））の中で、速記術を活用することの「利益」にふれ、また「場所はその老女の娘の家で、時は大抵夜分、周囲には話好きの中年の男女が数人居て、程よく相づちを打つて面白がつて聴き、折々は「私の方では斯うなつて居る」などと同じ郡内でも村により家によつて、伝への変つて居ることを語つて、細かな点の異同を注意した」という「採集の方法」に賛同する。なお、この書評は、一九三三年三月十八日の「東京朝日新聞」

に載つた。

(18) 岩倉「喜界島昔話（一）」「島」一一二 一九三三・六。中根式速記は、一九一四年、当時大学一年生の中根正親が創案し、普及活動には弟の中根正雄（旧名正世）があつた。

(19) 岩倉「昔話採集の経験」「昔話研究」一一二 一九三五・六。中根正世『通俗・中根式速記法』九版一九二九・十二（初版一九二七・十二） 中根速記學院発行・有斐閣書房大売捌。

(21) 兼子次生「速記と情報社会 古代ローマから21世紀へ」一九九九 中央公論新社。

(22) 在学中に「昔話や民話に興味をもつたようである」（拵嘉一郎「岩倉市郎氏喜界島民俗調査のこと」（『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集12』一九九五）とも、「中學時代から集めて解釋を附した同島の方言集は、かなり價値のあるものである」（伊波普猷「鬼界雜記」『民俗學』一一六 一九二九・十二）とも紹介される。

(23) 注（5）櫻田論文に同じ。

(24) 「學生諸君」の字体は他よりも大きく、特に學生への普及に力を注ぐ。中根正雄（正世）は「速記文字国字運動を掲げて、全国中等学校を歴訪し、クラブ活動としての速記部を勧めて回つた」人物でもある（注（21）より）。

(25) 注（5）櫻田論文に同じ。

(26) 財団法人民俗学研究所「序」（岩倉「おきのえらぶ昔話」一九五五 古今書院）。

(27) 清野久雄「東田川郡昔話」「昔話研究」一一九  
一九三六・一。

(28) 鈴木棠三「くつたん爺のこと―對馬の話者―」「昔話研究」  
二一九 一九三七・七。

(29) 注(8)「隱岐の島昔話」に同じ。

(30) 「十一月二十七日、正午より夜半過迄の話」に続く「以上十一月二十八日の話」までをふくめて、「以上は喜界村浦原富實禎爺談」とあるので、明記していない限り富實禎さんの話のはずだが、『喜界島昔話集』では平莊助さんとなっている。

(31) ただし、一九七四年に「日本昔話記録」として再刊された『鹿児島県喜界島昔話集』では、雑誌の初出の記述に戻す。岡見正雄「再版解説」を参照。

(32) 岩倉「喜界島昔話 鹿兒島縣大島郡―」「昔話研究」一一四 一九三五・八。

(33) 『老嫗夜譚』と『加無波良夜譚』とは、ともに題名に「夜譚」をもつだけでなく、本のつくりが似ている。『加無波良夜譚』を出すに際して、ひとつの目安となったのが『老嫗夜譚』だったのであろうか。

(34) 伊波普猷によると、岩倉は喜界島の方言集を編む過程で「東條氏〔藤久注・東條操〕の『方言採集手帖』によつて、更に多くの語彙を加へ」ていたという(注(22)より)。「方言採集手帖」を携えての語彙の拾い集め方は、岩倉の場合、

昔話のことはを聴き集め、書きとめる際にも影響したのか、今後考えていきたい。

(35) 岩倉「盲の水の神(蛇女房)」「昔話研究」一一九  
一九三六・一。

(36) 岩倉「奄美大島昔話」「昔話研究」二一三 一九三六・七。

(37) 岩倉「南蒲原郡昔話(二)―新潟縣南蒲原郡葛巻村其他―」「昔話研究」一一二 一九三五・六。

(38) 岩倉「南蒲原郡昔話」「昔話研究」二一一 一九三六・五。

(39) 『島』一一四「喜界島昔話(三)」の途中で、「以上十一月二十三日午後の話」と記される。日時の記述は、連載三回目にしてここで初めてあらわれ、この「以上」は、「喜界島昔話」(一)、(二)から(三)の途中までを指すと考えた。富實禎さんに話を聴いたのは二十三日が初日で、「天道さん金の網」という題名に該当する昔話は、内容からこの「姉妹と鬼」と判断した。

(40) 岩倉「喜界島昔話(二)」「島」一一三 一九三三・七。

(41) 岩倉「喜界島昔話(五)」「島」一一六 一九三三・十。

(42) 岩倉「喜界島昔話(三)」「島」一一四 一九三三・八。

(43) 岩倉「喜界島昔話(四)」「島」一一五 一九三三・九。

(44) 注(22) 按論文に同じ。

(45) 日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』二十四  
一九七三 三一書房。

(ふじひさ・まな／東京大学大学院)